高校生の StuDyGs はどこにあるのだろうか

~JICA 中部3名の講師による1年生国際理解講演会~

令和3年10月28日(木)

例年この時期に開催される、1年生対象の国際理解講演会。今年は、秋山 槙(まき)様はじめ、 3名の講師を JICA 中部からお迎えした。 JICA とは Japan International Cooperation Agency の 略で、「独立行政法人」国際協力機構」(所管は外務省)のことである。

1 秋山 槙様 (開発教育事業担当)

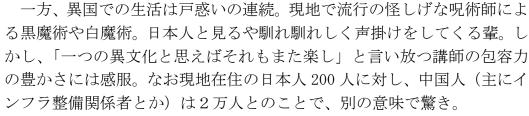
最初に、JICA の役割についての概要説明があった。JICA が行う国際協力は、資金協力と技術協 力の二つ。後者は、人を通じた協力のことで、「専門家の派遣」、「研修員の 受入れ」、「世界で災害が起こった際の国際緊急援助」、そして「市民に国際 協力についての周知、国際協力に参加する機会の提供」である。さて、世界 に目を向けると、安全な水が手に入らない、電気が供給されないなどの開発 途上国で暮らしている人は全体の約80%。そこで「誰一人取り残さない」



2 平山 あゆみ様 (協力隊事業担当)

青年海外協力隊員として派遣されたモザンビークでの2年間の経験を話 された。環境問題、特にゴミ問題の解決に向けて、現地の人と一緒に挑戦 したことを力説。具体的には、「ごみのポイ捨て」を悪いことと思わない人 たちをどう意識改革していくか。任務地、首都マプト市役所の同僚と協議 するも、即効性がある解決策はなかなか見つからず苦戦。街中の大人に、 そして学校で子供たちに粘り強く啓発活動を実施し各家庭での意識の浸 透を図ったとのこと。カニマンボウ(現地語で、ありがとう)が合言葉か。

という考えのもと 2015 年、SDGs (持続可能な開発目標) が定められた。







3 出口 彩夏様 (インターン生)

半田のご出身で現在は大学4年生。生徒と年齢が近く生徒自身のキ ャリアを考える上でも示唆に富む話であった。高校時代のヨット部で 鍛えた体力と気力で受験を乗り切る。そして大学1年生での、JICAの 方との出会い。それが転機となり、一念発起してインドネシア留学へ。 現地では天国と地獄を味わうが、そこでこれまたヨット部で培った、 周りの風や波、掛け声にうまく乗る順応力とコミュニケーション力が 生きる。帰国後は、現地で知り合った人たちへの恩返しがマストと考 え、子供たちの教育支援にオンラインで携わる。講師はデスクワーク が苦手と謙遜するものの、決してそんなことはない。現地の言葉の理 解に苦しみ、それを打破しようと定期購読したという新聞のスクラッ





プノート。その切り抜きの横に書かれた、涙でにじんだ文字が何よりの証拠。その毎日のノートの 1行1行こそが、帰国後に現地の子供たちのために作った日本語教材につながる。 軽いフットワー クで広いフィールドワークに出かけ、それを自らのライフワークにしようという意気込みの裏に は、そうした一つ一つの厳しい地味な現実の積み重ねがあったことを我々は忘れてはいけない。